

占察経の成立と受容—なぜ占いが必要とされたのか

師 茂樹 (花園大学)

隋代に成立した偽経とされる『占察善悪業報経』(『占察経』)は、天台智顛の懺法の影響が指摘されるサイコロ占い(木輪相法)が説かれた前半部分と、『大乘起信論』の影響が指摘される唯心識観、真如実観などを説く後半部分によって構成されている。

本発表で検討する前半部分については、中国思想の影響も指摘されているが、近年、山部能宜氏らによって明らかにされた、インド～中央アジアにおいて発展し東アジアでも盛んに行われた好相行の影響が大きいと考えられる。好相行は、特に菩薩戒の自誓受戒において、懺悔滅罪の証拠として仏菩薩の姿を目の当たりにする(仏菩薩が滅罪を認定する)という神秘体験を特徴とする。『占察経』においても好相行が説かれるが、これは木輪相法によって知られた宿世の重い悪業を懺悔によって滅ぼしたことを確認する手段として説かれており、好相行と同類の方法と考えられているようである。好相行については、滅罪による利益を求める面もあったと思われるが、別稿で指摘したとおり、菩薩戒の受戒を含む大乘仏教への入門過程において修行者としての素質や自覚を確認するための方法として位置づけられる必要がある。『占察経』の構成を見ても、後半部分への導入として前半部分が位置づけられていることが見て取れる。

木輪相法については他の仏典に類例が見られないものの、中国の伝統的な占いだけでなく、『婆沙論』に説かれる占夢書など、インド以来の夢占いの技法も下敷きにしているのではないかと思われる。いずれの場合も、過去世や未来世などを見通すことができるのは如来をはじめとする神通力を持った聖者のみであり、聖者たちから知識を得るための方法として懺法や夢見がある、という考えが背景にあったのではないかと思われる。つまり占いは、過去の仏説の記録という体裁になっている経典そのものよりも、仏のメッセージをより直接的に現在において感得できる方法だと考えられるのである。末法開始前後の衆生にいかに信心を生ぜしめるか、という問題意識に貫かれている『占察経』においては、仏説を直接聞くことによって修行者としての自信、確信を持つための方法として占いが求められたのではないだろうか。

『占察経』は東アジアにおいて広く受容されたが、本発表では特に古代日本における受容に注目したい。鑑真来日まで『占察経』を用いた自誓受戒が行われていたことはよく知られているが、それ以降も『占察経』は様々な形で重視されていたようである。平安初期に成立した仏教説話集である『日本国現報善悪霊異記』(『日本霊異記』)には、『占察善悪業報経』との名前の共通性が見て取れるが、内容的にも好相行や占いなどの要素が取り入れられていることが明らかになっている。ここでも、自身の素質に疑問を持つ著者・景戒が、修行者としての自信と確信を持つための方法として『占察経』的なものを求めていたことが窺える。

キーワード：好相行、夢見(夢占い)、『日本霊異記』